

A Sociological Study on the Grassroots Environmental Movement after Reformation in Indonesia: A Case Study of Water Source Conservation Movement in Batu, East Java

Kristiono, Dwi Susilo Rachmad

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

203

(発行年 / Year)

2018-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675乙第228号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2018-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(公共政策学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00014637>

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	Rachmad Kristiono Dwi Susilo
学位の種類	博士（公共政策学）
学位記番号	第 667 号
学位授与の日付	2018 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(2)該当者(乙)
論文審査委員	主査 教授 藤倉 良 副査 教授 池田 寛二 副査（学外）千葉大学客員教授 青木 武信

A Sociological Study on the Grassroots Environmental Movement after Reformation
in Indonesia : A Case Study of Water Source Conservation Movement in Batu, East Java

I. 論文内容の要旨

1. 本論文の目的と意義

ラフマッド・クリスティオノ・ドゥイ・スシロ氏は、2014 年 4 月から日本学術振興会の論文博士号取得に対する支援事業に採用され、法政大学大学院公共政策研究科公共政策学専攻を受け入れ先機関として論文博士号取得のための研究に取り組み、2017 年 2 月 20 日に博士学位請求論文 **A Sociological Study on the Grassroots Environmental Movement after Reformation in Indonesia : A Case Study of Water Source Conservation Movement in Batu, East Java**（『改革期以降のインドネシアにおける草の根環境運動についての社会学的研究：インドネシア東ジャワ州バトゥにおける水源地保護運動の事例研究』）（以下、本論文と呼ぶ）を提出した。

本論文は、英文、A4 版ワープロ横組みで 1 頁 42 行のフォーマットで書かれており、目次、文献リスト、資料を含めて、合計 213 頁から成る。

（本論文の目的）

20 世紀末から 21 世紀にかけてのインドネシアでは、中央集権的開発独裁体制から民主的
地方分権体制へと転換する改革運動が進められてきた。その結果、地方政府は原則として
中央政府の関与なしに、地域の環境・資源を管理することができるようになった。しかし、
皮肉にも、地方分権化によって新たな構図の環境問題が全国的に広がった。すなわち、従
来の中央政府の開発政策による環境破壊という構図ではなく、地方政府の開発政策による

環境破壊という構図の環境問題が頻発するようになったのである。本論文は、そのような新たな構図の環境問題の代表的な事例のひとつである水資源問題に焦点をあて、その実態と解決のための政策課題を行政と住民の相互作用過程を通して明らかにすることを目的とするものである。

この目的にアプローチするために、本論文では東ジャワ州バトゥ市において現在進行中の水資源をめぐる地方政府と住民運動の相互作用の動態を事例として取り上げている。その理由は、全国で数多く見られる水源地をめぐる地域問題のなかで、バトゥ市の事例は行政による開発政策に変化を促す住民運動が持続的に展開されている稀有な事例だからである。なぜ、あまたある水源地保護運動の中で、バトゥ市の運動は行政に影響を及ぼしつつ、持続的に展開することができるのか。そのことを明らかにすることが、本研究の最も重要な課題となっている。

(本論文の意義)

本論文には大きく四つの意義が認められる。

一つ目は、ラフマッド氏自身の現在の居住地に近い身近な地域であるバトゥ市の事例を取り上げることで、ネイティブ・エスノグラフィーとして、地域社会の内部の視点から運動を描き、外部の観察者が陥りがちなステレオタイプ（たとえば、住民は環境政策や法的手続きには素人だから感情にまかせて実力で反対しているだけとか、結局は補償金をめぐる取引でまるめこまれるだけ…といったステレオタイプ）を払拭している点である。ホテル建設業者から告訴され、地裁から最高裁まで法廷闘争にもつれこんだにもかかわらず、バトゥ市の住民による水源地保護運動は、決して感情的な実力行使にも目先の利益享受にも左右されず、理性的に粘り強く継続され、リゾートホテル建設を事実上中止させ、地方政府による環境政策にも影響を及ぼしている。本論文は、何故そのようなことが可能となったのかを、運動の開始時より継続してきた詳細な参与観察にもとづく事例研究によって実証的に解明することで、インドネシアの今後の環境政策・環境保護運動研究に有意義な貢献をもたらしたものと評価できる。

本論文の二つの目の意義は、地域住民の環境保護運動に持続性を与えている社会文化的な要因を、社会関係資本 (social capital)、文化資源 (cultural resources)、コレクティブ・アイデンティティ (collective identity) という社会学的分析概念をもちいて、事例内在的に解明した点にある。本論文ではその運動の進行過程の渦中で実施したフィールドワークによって得られた民族誌的データにもとづき、バトゥ市の運動の特質とその持続性は大きく3つの要因によって説明できることを明らかにしている。すなわち、(1) 参加者一人一人が豊かで多様な社会関係資本と文化資源をもっていること、(2) それらが融通無碍に結びついて柔軟な社会的ネットワークが形成されていること、(3) そのようなネットワークの持続性はこの地域の住民に特有のコレクティブ・アイデンティティの形成によって生み出されたこと、である。社会関係資本、文化資源、コレクティブ・アイデンティティの三つの

概念を結び付けて考察することで、いずれかひとつだけでは説明として不十分だった運動の持続性の要因をめぐる議論に対して新たな複合的・重層的視点を提示している点に意義を認めることができる。

本論文の三つ目の意義は、公共政策としての環境政策に実証的な事例研究にしかできない独自の示唆を投げかけている点にある。政策決定過程には、多様なステイクホルダーが既存の制度（法制度など）や手続き（行政手続きなど）の枠組みの中で複合的に関与しながら意見調整をはかることが重要である。本論文は、バトゥ市の住民による水源地保護運動が、多様な社会関係資本を活用して地方政府に働きかけ、法（環境法や行政法、政令）や中央政府機関（環境省、国家人権委員会、インドネシア・オンブズマン委員会など）、そして裁判制度を理性的に「使いこなし（make full use）」、地方政府の政策に影響をもたらすに至った政策過程をヴィヴィッドに描き出している。そこからは、感情的に実力に訴えたり目先の利益のための取引に絡め取られることなく、住民は開発と環境保護をめぐる複雑な政策過程にいかにかつ実質的かつ理性的に関与することができるのか、多くの貴重な示唆を読み取ることができる。

本論文の四つ目の意義は、インドネシアの環境社会学に対する貢献にある。インドネシアではまだ、改革期以後の地方分権化が生み出した新たなタイプの環境問題をめぐる社会学的研究の前例は非常に少ない。さらに、本論文のように、地域社会の草の根から事例を掘り起こして環境運動のダイナミズムを実証的に検証した研究は極めて稀有である。その意味で、本論文はインドネシアにおける環境社会学的研究のパイオニアとしての意義を有する。

2. 本論文の構成と内容

（本論文の構成）

本論文は次に示すとおり、全12章と補足資料（最高裁判所判決文本文と英語概要）で構成されている。

Contents

List of Tables	v
List of Maps and Figures	vi
Acknowledgements	viii
Chapter 1 Introduction	1
1.1 Environmental Crisis in Reformation Era	1
1.2 Environmental Laws in Indonesia	3

1.3	Water Policy and Governance in Indonesia	5
1.4	Organization of the Dissertation	8
Chapter 2	Research Question, Hypothesis, and Theoretical Framework	10
2.1	Research Question and Hypothesis	10
2.2	Theoretical Framework	10
2.3	Research Method	13
Chapter 3	Description of the Case: Ecosystem, History, and Socio-economic Condition of Batu	15
3.1	Batu and its Ecosystem	15
3.2	History of Batu	21
3.3	Socio-economic Condition of Batu	22
Chapter 4	Water Governance in Batu before Reformation: HIPPAM	25
4.1	Formation of HIPPAM	25
4.2	Activities of HIPPAM	27
Chapter 5	Shifting of Development Policy in Batu after Reformation	29
5.1	Shifting Batu City Development Policy: Apple City to Tourism City	29
5.2	The Initiator of Policy Shift	32
5.3	Impacts of Policy Shift	33
Chapter 6	Chronology of The Movement	36
6.1	Protest the Hotel Construction Plan	36
6.2	Actions through FMPMA	38
6.3	Negotiation with the Mayor	40
6.4	Strategy Change: From Negotiation with the Local Government to the Cooperation with the Central Government	42
6.5	SLAPP (Strategic Lawsuit Against Public Participation) by the Hotel Investor	44
6.6	Latest Condition and Characters of the Movement	45
Chapter 7	Main Actors of FMPMA and Their Social Capitals	47
7.1	Education and Expertise	47
7.2	Javanese and Islamic Knowledge	50
7.3	Connection with the Government	54

7.4	Leadership and Encouragement	56
Chapter 8	Basic Motivations and Cultural Backgrounds	60
8.1	<i>Ibadat</i> : Responsibility to Allah	60
8.2	<i>Untuk Anak Cucu</i> : Responsibility for next Generations	62
8.3	<i>Keadilan, Kejujuran, and Perjuangan</i> : Justice, Honesty and Fighting through Self-sacrifice for Public Good	64
8.4	Awareness of Global Environmental Discourse	66
Chapter 9	Social Network of The Movement	67
9.1	<i>Tokoh Masyarakat</i> : Leadership in Javanese Society	67
9.2	<i>Orang Tua</i> : A Kind of Javanese Paternalism and relation between elder and younger generation	69
9.3	<i>Gotong-Royong</i> : Javanese Custom of Reciprocity	71
9.4	Harmonization of Extremists and Moderates: “H. Rudi Group” vs. “Basuki Group”	74
Chapter 10	Framing Process of Collective Identity Formation	78
10.1	Identity as <i>Wong Lor Brantas</i> (Nothern Brantas River people)	78
10.2	Framing process through Islamic Institutions: <i>Tahlil, Pengajian, Slamatan, and Istigosah</i>	80
10.3	Framing Process through Javanese Institutions: <i>Wayang, Bantengan, and Jagongan</i>	91
10.4	Framing Process through Slogans and Humor: <i>Sastra and Guyon-guyon</i>	99
Chapter 11	Policy Implication	103
11.1	To Make Full Use Regulations	103
11.2	To Make Full Use National Institutions	107
11.3	To Make Full Trial at Court	109
Chapter 12	Conclusion	112
References		116
Glossary		131
Appendix 1	Judgement of the Supreme Court (Original)	136
Appendix 2	Judgement of the Supreme Court (English Summary)	202

(本論文の内容)

本論文では概略以下のような議論が展開されている。

序論（第 1 章）および問題設定と理論枠組み（第 2 章）をふまえて、この運動の舞台となっているバトゥ市の環境特性と歴史的経済的状況を記述し（第 3 章）、改革運動以前、HIPPAM（*Himpunan Penduduk Pemakai Air Minum*：飲料水使用のための住民組織）という伝統的水資源管理組織によっておこなわれていたバトゥ市の水源地管理の特徴について論じている（第 4 章）。さらに、水源保護運動のきっかけとなったバトゥ市の地域開発政策を歴史的に振り返り、今回の問題が起こった政治的・政策的要因を明らかにし（第 5 章）、時系列的に運動の経過を整理している（第 6 章）。

以上のようにバトゥにおける水源保護運動の歴史的、政策的および社会的な背景を整理したうえで、第 7 章以降、運動が持続性をもつことができた要因について、調査結果に依拠しながらより詳細に検討している。

まず、伝統的な水資源管理組織 HIPPAM を基盤としつつ、水源地周辺のホテル開発問題に取り組むことを目的としてアドホックに組織された FMPMA（*Forum Masyarakat Peduli Mata Air*：水源地保護のための住民組織）の戦略と活動実態、そのメンバーのもつ多種多様な社会関係資本を記述し、分析している（第 7 章）。

そのうえで、そのようなネットワークに広がりを持続性を与えた住民の中にある基本的なモチベーションと、それを生み出した多様な文化資源は何かを明らかにしている（第 8 章）。さらに、この運動を担ってきた多様な社会関係資本と文化資源をもつ多数の住民が織りなす社会的ネットワークを記述し、分析している（第 9 章）。そして、それらの多様な文化的資源が多く住民の間で運動に持続性を与えた最も根源的な要因が、運動の直接的参加者のみならず政府関係者も含めて多様な利害関係者の間に共有されるコレクティブ・アイデンティティの形成と制度化にあることを明らかにしている（第 10 章）。

以上の議論をふまえて第 11 章では、バトゥの水源地保護運動の事例から、改革による地方分権化にともなってインドネシアのあらゆる地域で深刻化し混迷を深めている環境・資源問題にどのような政策的インプリケーションを読みとることができるかを考察している。他の地域の類似の運動と異なるバトゥの事例の最大の特徴は、独自のコレクティブ・アイデンティティに依拠することによって、地方政府の政策に感情的に反対したり、実力行使に訴えたりせず、法制度も十分にわきまえた理性的な運動を展開し、その結果、水資源を脅かす開発政策に実質的な変化を促したことにある。要するに、バトゥの水源地保護運動は、政府対住民という二項対立図式に陥って硬直化することを住民が法制度やそれにもとづく政策を理性的に使いこなすことによって周到に回避し、それによって実現可能な政策の変化を導き出すことできたことを指摘している。最後に第 12 章（結論）では、それまでの考察を総括し、このような事例が今後のインドネシア各地の環境政策と環境運動に投げかけている重要な示唆を検討している。

II. 審査結果の要旨

1. 審査経過

2017年2月20日にラフマッド氏から本論文の提出を受け、大学院公共政策研究科教授会により同年2月28日に設置された学位論文審査小委員会は、書面等によるさまざまな形式の予備的な審査の後、2018年1月19日、全体でほぼ2時間にわたってラフマッド氏より学位論文審査小委員会委員に対して口頭説明を受け、それを踏まえて試問を行った。その結果、審査小委員会としてラフマッド氏に博士の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。

2. 評価

バトゥ市における水源地の管理・保護活動について修士論文研究から継続して実施された長期にわたる地道なフィールドワークにもとづく民族誌的データにより、改革運動による地方分権化にともなってインドネシアのあらゆる地域で深刻化し混迷を深めている環境・資源問題をめぐって起こった住民運動に持続性をもたらしている要因を解明した成果として、本論文は全体として極めて高く評価できる。

運動の持続性の要因分析として本論文の評価すべき成果として強調しておきたいのは、次の3つの論点である。まず第1に本論文では、バトゥ市における水源保護運動にかかわる人々のもつ社会関係資本の多様性と豊かさをリアルに描きだすことができている。運動のリーダーの中には地方政府で公務員として働いた経験とそこで築きあげた人間関係を生かして観光開発を推進しようとする地方政府との交渉に大きく貢献している者もいる。しかし、そのような地方政府とのつながりだけでなく、この運動には芸術家（画家）、インドネシアを代表する大企業で働いた経験を持つ者、大学やイスラーム学校を卒業した高い学歴を有する者、地元の農業生産者、農作物の仲買商、各種中小企業経営者など多様な背景を持つ者が多数参加し、それが文化・学術関係、実業界や宗教界にも運動のネットワークを広げることにつながっている。その結果この運動は、地方政府や中央政府（特に環境省、国家人権委員会など）、全国的なNGOや在野の環境や法律の専門家、イスラーム指導者との協働によって、地方レベルから国家レベルにわたる多様な政策過程に理性的かつ柔軟に介入することが可能になっている。

2つ目に本論文が明らかにしたのは、もともと異なる背景から生まれ、異なるモチベーションを持った人々の多種多様なネットワークが、この水源保護運動を焦点として、より重層的なネットワークに結びついた要因である。その要因は、この地域の人々が緩やかに共有している文化的価値によって説明できる。この運動のなかでは、グローバル（西洋的）な価値観（エコロジー、サステイナビリティなど）、イスラームの教え、ジャワの伝統的価

価値観、あるいは北部ブランタス川流域住民の独自の文化的アイデンティティが融通無碍に混濁し、そのような価値観が異なる背景を持つ人々を水源保護というひとつの目的に収斂させている。運動の参加者のなかには、次世代への責任（世代間倫理）というグローバルに受け入れられている西洋的な価値観を強調する者もいれば、水源を守ることは神に対する責任を果たすことになり来世で天国へ行くことができる (*ibadah*) というイスラームの教義を強調する者、公正さ・正直さ・自己犠牲 (*keadilan, kejujuran, perjuangan*) といったジャワの伝統的な規範を強調する者もいる。さらには水をめぐるさまざまな慣習の中にある、北部ブランタス川流域に特有の伝承や価値観を強調する者もいる。すなわち、この運動に持続性と広がりを与えたのはこのようなグローバルからローカルにいたる多様な価値が融通無碍に融合された文化資源だと考えられるのである。本論文はそのことを詳細な質的データによって実証的に明らかにした研究成果として高く評価できる。

3つ目に本論文の最大の成果は、提出者ラフマッド氏自らのさまざまな会合、集会、イベントにおけるインテンシブな参与観察とインタビューによって、ほかの地域と異なりこの運動に持続性と広がりを与えた最も根源的な要因を明らかにしたことである。それは、運動そのものの展開過程において形成され、制度化された独自のコレクティブ・アイデンティティ（社会運動の過程において生み出される目的、手段や活動の場に関する認知枠組みを形成する（フレーミング）相互作用的に共有されるアイデンティティ）である。具体的には、タフリール (*tahlil*; イスラーム教徒による集団祈願)、プガジアン (*pengajian*; コーラン学習サークル)、イスティゴサ (*istighosah*; イスラーム儀礼)、スラムタン (*slametan*; ジャワ・ムスリムによる食事の共同などを通して行われる儀礼)、ジャゴガン (*jagongan*; インフォーマルな集まり)、およびスローガンや集まりに独特の雰囲気醸し出すジャワ的なユーモア (*guyon-guyon*; グヨングヨン) などが、フレーミングの過程で活用され、そこから独自のコレクティブ・アイデンティティが形成され、運動の広がりや持続性を生み出していることを明らかにしている。すなわち、ホテル建設にともなう水源地の危機という現実的かつ政治的な問題について話し合う際にも、バトゥの人々はコーランの朗読や祈り、ジャワ的な集会儀礼、ジャワ語を巧みに操るユーモアなどをフレーミングのために機能させ、彼らの運動のコレクティブ・アイデンティティを生み出していることが明らかにされているのである。

以上のように、本論文は環境社会学における学問的貢献という観点からしても、途上国における環境政策・環境保護運動に関する理論的・実証的洞察という点においても極めて高く評価できる論文である。

さらに、こうした評価すべき点が、長年にわたるバトゥ市での現地調査による「厚い記述」から導き出されたものであることを高く評価したい。ラフマッド氏は身近な地域である利点を最大限活用し、フォーマルな集会やデモから宗教儀礼やインフォーマルな集まりまで参加し、そしてホテル業者に訴えられた裁判過程も傍聴が可能である一審と二審の約8割を傍聴し、運動の主要メンバーを中心に関係者へのインテンシブなインタビューをおこ

なっている。本論文にリアリティと説得力を付与している最大の要因が、このような現地調査によって得られた独自の知見と洞察にあることは明らかであり、その意味で本論文は環境保護運動の貴重なモノグラフとしても高く評価されてしかるべきと思われる。

とはいえ、本論文には、当然のことながら、さらに研究を深めねばならない多くの課題が残されている。

まず、本論文は運動内部のダイナミズムの解明を中心課題とするあまり、運動が反対しているホテル建設を推進する市長をはじめとした市政府関係者、ホテル業者、ホテル賛成派住民についての言及が、ほとんどなされておらず、相互作用の検証という点ではいささかバランスを欠いていると言わざるを得ない。審査小委員からもこの点が指摘され、現時点で可能な限りの改善に努めた労は認められものの、ホテル建設を推進する側の人びとについての調査と考察は今後の重要な課題として残されている。

次に、バトゥ市の住民運動の経緯の中で重要な位置を占める裁判過程についての記述、分析は必ずしも十分とは言えない。この点も審査小委員から指摘され、最高裁の判決文とその英語概要は本論文に資料として添付されたが、被告の立場に立った住民側がいかなる裁判過程を経て原告側のホテル業者に勝訴し、水資源の保護を法廷で公認させることができたかについてのより踏み込んだ検証は今後の課題としてとどめざるを得ない。

さらに、バトゥの事例はインドネシアにおける改革運動による地方分権化が進む中で起こったものとして言及され、本論文の題名でも「改革期以降の」とされているが、運動や水源地をとりまく状況が改革期以前と以後の社会や政策のいかなる変化によって推移したかに関する因果関係については、必ずしも十分な考察がなされているとは言えない点も審査小委員から指摘された。それを補うには、改革期インドネシアの社会や諸制度の変化を本論文を踏まえてさらに詳細に検討する必要がある、この点も今後の重要な課題である。

また、本事例ではバトゥ市民が引き続き伝統的な水利用を行うことを望んでいることが前提となっている。本研究の範囲を超えているとも言えるが、ホテル建設の是非は別として、住民が近代的水利用についてどのような考えを有しているかは論じられていない。この点も今後の研究に期待する。

しかし、これらは本論文の博士論文としての価値を減ずるものではない。むしろ、以上のような今後の研究の課題と方向性を明確に指し示すことができたということもまた、博士論文の収穫として評価すべきであろう。

3. 結論

以上述べたように、ラフマッド・クリスティオノ・ドゥイ・スシロ氏の論文博士学位請求論文は、厚みのある実証的な事例研究、その社会学的分析にもとづくインドネシアの環境運動と環境政策の今後の方向性に関する示唆など、いずれの点から見ても先行研究に類

例のない独創性と学術的な貢献が顕著に認められるものであり、博士号の授与に十分に値するものと考えられる。

したがって、本論文審査小委員会は、委員全員の一致した意見として、ラフマッド・クリスティオノ・ドゥイ・スシロ氏に博士（公共政策学）の学位が授与されるべきであるとの結論に達した。